

## 「2019年タイ・チュラーロンコーン大学サマースクール派遣参加報告書」

京都大学文学部 2年 藤澤奈穂

今回このプログラムに応募したのはタイという国に対する興味からである。私は文学部の授業の一環でタイ語を少し勉強していた。実際に現地へ行ってタイ語を使ってみたいし、もっとタイ語がつかえるようになりたい。そんな思いからこのプログラムに応募してみようと思った。またこのプログラムではタイの文化に触れることができるだけでなく、実際にタイの学生さんと交流することができるのも魅力的だなと感じた。

タイ語の授業は英語で行われ、日常会話を中心として1日に3時間ほどの授業があった。2週間タイ語を勉強し、タイ語とタイ文字であふれる中で生活したことで聞き取れるタイ語も増え、自分の中でタイ語がめきめきと上達する実感を感じた。これからももっとタイ語の勉強を続けたいと考えている。

タイのチュラーロンコーン大学へ実際に行ってタイ人の学生と交流してみてタイ人の学生の優秀さにとっても驚かされた。わたしたち京大生は英語を喋れるといってもそこまで流ちょうに話すことはできない。しかしタイ人の学生たちは英語に加え日本語もとても堪能だった。また語学だけにとどまらず一緒にプレゼンをする活動もあったが、その中でもタイ人の学生たちの発想力の豊かさやまとめ方のすばらしさやその積極性に驚かされた。実際にタイ人の学生と交流をしたことで多くの刺激をうけ自分ももっと勉強をしなきゃいけないなという気持ちにさせられた。

また、タイ人のあたたかさ、明るさもとても印象に残っている。今回のプログラムでタイ人の学生さんには大変お世話になった。空港まで迎えに来てくれ、いろいろなところを案内してくれたり、一緒に食事を取ったりした。タイ人の方々はとても私たち日本人にとっても親切だった。また「マイペンライ」というタイ独特の文化、細かいことにとらわれず気楽にいこうという考えは日本にはない、足りないところで、神経質に悩むのではなく少し視野を広げてみることの大切さを感じた。実際にタイへ2週間行ってみてタイの文化を学ぶことができただけでなく、学生間での交流も深めることができ多くの刺激をうけることができた。

このプログラムの中で私は充実した2週間を送ることができた。その中でやはり実際に現地の国を訪れることの大切さを実感した。時代の流れの変化は激しく、メディアの影響力は大きい。例えば今は日本とタイの関係は良好であるが将来、いつその関係がくずれるかわからない。そのような中でメディアなどから得た情報だけでなく自分の目で見て感じた経験はとても大切だ。こういった派遣研修は両国の関係維持という面から見てとても有用であると思う。